

# 幼稚園「保育内容（言葉）」と小学校「国語科」を連携させた物語指導の在り方

—伝承物語の読み聞かせから描写を中心とした小説の読解へ—

Teaching methods of stories by cooperation between kindergarten “Childcare contents- Words” and elementary school “Japanese Language”:

From storytelling of folklore to comprehension of novels focusing on description

光野 公司郎<sup>1)</sup>・篠原 京子<sup>2)</sup>

Koshiro KONO・Kyoko SHINOHARA

## 概要

読書指導の課題としては、学齢が進むにつれて読書離れが進んでいるということがあげられる。この要因は、絵を主体とする絵本から言葉を主体とする物語・小説に変わっていくことにある。つまり、言葉を読むということへの抵抗が大きいということになる。本稿では、課題解決のための読書指導の方向性を明らかにする。具体的には、言葉への抵抗をなくすための幼小連携による伝承物語の読み聞かせ指導と、特に言葉の中でも読解が困難な描写に着目した段階的な読書指導の在り方を提案していくものとする。

キーワード：絵本，伝承物語，物語，小説，描写，読書指導

## Abstract

As a problem of teaching reading, there is a tendency to read books less as school age advances. This factor is to change from a picture book chiefly composed of pictures to a story / novel mainly composed of words. In other words, resistance to reading characters increases. In this paper, we clarify the direction of teaching reading to solve problems. Specifically, through cooperation between kindergarten and elementary school, we will propose reading instruction of the folklore to eliminate resistance to the words. And we propose a way of gradual reading instruction focusing on the description of difficult to read words.

**Keywords:** Picture books, Folklore, Stories, Novels, Description, Teaching reading

## 1. 問題の所在と今後の方向性

幼稚園では、絵本や紙芝居の読み聞かせが日常的に行われており、小学校でも子どもたちは読書の時間を楽しみにしている。幼児や小学生は読書が好きである。一方、中学校、高校と学齢が進むに伴う読書離れが報告されており、現在の読書指導が十分な成果を上げていないことが分かる。

本発表では、子どもの読書意欲の継続を図り読書好きの大人を育てるための、幼小を連携した読書指導について提案する。なお、論理的文章と文学的文章はその目的や読み方が大きく異なり、一緒に論じることは

---

<sup>1)</sup> 共栄大学 教育学部

<sup>2)</sup> 常葉大学 保育学部

できないため、本発表では、以下文学的文章—物語・小説—を対象とした「読書」に限定して述べることにする。

## 2. 小中高生の読書の実態

### 2.1 「学校読書調査」から

第63回学校読書調査(公益社団法人全国学校図書館協議会・毎日新聞社)<sup>注1</sup>では次のような調査結果が報告されている。

① 2017年5月1か月間の平均読書冊数 小学生 11.1冊, 中学生 4.5冊, 高校生 1.5冊

② 2017年5月1か月間の不読率 小学生 5.6%, 中学生 15.0%, 高校生 50.4%

この結果から、小中高と学齢が進むにつれて読書離れが進んでいることが分かる。

### 2.2 読書アンケート調査から

中村(2018)<sup>注2</sup>による大学生へのアンケート調査では、読書量が減った理由についての大学生の言葉が次のように報告されている。(傍線は篠原による。)

小学生の時は絵本やゾロリなどの挿絵の多い本を読んでいたのですがすぐに読めてしまったけど、中学や高校では読む本は文章も長くなり、一冊を読むのに時間がかかり、そうたくさんは読めなくなってしまった。

この感想からは、挿絵が多く文字の少ない本の読書から、文字の多い本の読書への移行に困難を感じる中高生の姿が分かる。言葉を主体とした読書指導が適切に行われていないことが、読書離れの要因の一つだと考える。

## 3. 発達段階を踏まえた読書指導の先行研究

### 3.1 幼小の目的の違い

大越(2009)<sup>注3</sup>は、幼小の読書指導のねらいには次のような違いがあると述べている。

幼稚園 「なるべく数多くの絵本に接するようにすることを基本とし、(中略)自分の好きな絵本を見つけ出して読んだりすることにねらいがある」

小学校 「小学校の一年生が教科書で接する童話の数は、多いとはいえない。(中略)一つ一つの作品に時間をかけ、前述したような多くのことがらを学習していくのが、小学校の国語科の授業ということになる。」

幼稚園が多読及び意欲を重視しているのに対し、小学校は学習が優先されるという大越の分析は的確である。大越の分析をもとに幼小連携のための対策を講じる必要がある。

### 3.2 言葉主体の幼年文学の読み聞かせ

瀧(2010)<sup>注4</sup>は、絵本と読書について次のように述べている。(傍線は篠原による。)

小学生の保護者の方からは「うちの子は、小さいときにたくさん絵本を読みきかせて、あんなに絵本が好きだったのに、小学校に入ってから自分ですら本を読もうとしない」といったご意見もきかれます。幼い頃に絵本を楽しんだことと、将来読書好きな子になることは本当に関係がないのでしょうか。

さらに、その解決策として、四～五歳からの「幼年文学」の読み聞かせが有効だとし、絵本と幼年文学の違いについて次のように述べている。

絵本も幼年文学も読んであげるための本なのです。ただ、絵本と幼年文学の違いは、絵本は絵がイメージを助けてくれますが、幼年文学は挿絵があるものの、基本的には言葉のみによって聞き手である子どもたちが物語の内容をイメージして楽しむところにあります。（中略）幼年文学は、絵本と、本格的な自律の読書の中間の、とても重要な役割をになっていると言えます。

絵主体の読書から言葉主体の読書への移行には大人の支援を要するという見解が優れている。中継役となる「幼年文学」については作品例が示されており、その条件は明示されていない。

### 3.3 発達段階に適した教材の選択

市毛（1983）<sup>注5</sup>は、「描写という表現技法に着目すると、文学的文章が児童に映ずる『難しさ』が段階づけできる」として、発達段階に応じた文学教材案を以下のように提示している。

- 伝承物語（学齢前後から小学三年くらい）
- 創作物語（小学二年から小学四年くらい）
- 英雄物語（小学三年から小学五年くらい）
- 伝記（小学四年から中学以上まで）
- 教養物語（小学五年から高校以上まで）
- 近代小説（中学以上）

「描写」が文学的文章の「難しさ」の指標となるという市毛の指摘は示唆に富む。「描写」に着目した段階的な読書指導を行うことによって発達に応じた「読書力」を育成し、学齢が進むに伴う読書離れを防ぐことができる考える。

## 4. 絵本、物語・小説について

### 4.1 絵本について

絵本とは、『広辞苑』<sup>注6</sup>によれば「絵を主体とした児童用読み物」、『日本国語大辞典』<sup>注7</sup>によれば「絵を主体とした子ども向きの本」、『児童文学事典』<sup>注8</sup>によれば「文字の読みの習得がまったく、あるいは十分に成されていない段階の子どもに向けて、絵を伝達の主力手段とした本」とあり、絵本は主に読書への導入段階での一時的な役割を果たすものととらえられてきた。

しかし、『日本児童文学大事典』<sup>注9</sup>では、「絵（または絵と文）を用いてストーリーやテーマを効果的に表現したもの」とし、「『絵本』はもはや子どもだけのものではなく、読書の第一歩として与えるものでもない。もはや『絵本』は児童文学の一領域に止まらず、芸術の一領域となった」と述べて、絵本独自の価値を強調している。

### 4.2 物語・小説について

『日本国語大辞典』によれば、「物語」<sup>注10</sup>は「作者の見聞または想像をもととし、人物・事件について人に語る形で叙述した散文の文学作品」「近代文学で、ノーベル（小説）に対し、一貫した筋を持つストーリーという概念にあてた語」とされ、「小説」<sup>注11</sup>は「作家の想像力・構想力に基づいて、人間性や社会のすがたなどを、登場人物の思想・心理・性格・言動の描写を通して表現した、散文体の文学」とある。

明確な区別は難しいが、いずれも言葉を主体とした散文による文学作品で、「物語」はストーリーの展開に、「小説」は描写による表現に重きを置くものととらえることができる。小・中学校の学習指導要領や教科書では、小学校が「物語」、中学校が「小説」という名称を用いていることから、本発表でも以下それに倣うものとする。

## 5. 文学的文章の読み方指導

文学的文章の特徴と小中学校における指導の手順を述べる。

### 5.1 文学的文章の特徴

同じ日本語の文章でも、文種によってその読み方・書き方は大きく異なる。論理的文章が「正確な情報の伝達」を目的としているのに対して、文学的文章には以下のような特徴がある。

- ①目的…他の人生に学ぶ・楽しむために読む
- ②構成…自由（小説・物語では「はじめ・なか・おわり」が多い）
- ③順序…自由（時間的順序が多い）
- ④言葉…詩の言葉（イメージの広がりが大切）
- ⑤文体…語り・会話・描写で書かれる（主語等の省略が多い、比喩・倒置等の技法が多用される）
- ⑥読み方…楽しく豊かに読む
- ⑦読む学習…必要
- ⑧書く学習…不要（希望者はどんどん書いてよい）

### 5.2 指導の手順

小中学校の国語科教育で物語や小説を指導するには、次の手順<sup>注12</sup>が効果的である。

- ①音読
- ②登場人物
- ③あらすじ（場面の名づけ）
- ④主人公の人物像の変化
- ⑤「語り」と「描写」
- ⑥感想
- ⑦読書指導

手順①～⑦の中で、物語・小説の読書力を高める鍵となるのは⑤の「描写」である。市毛（1983）によれば、「描写」とは「文字で描いた動く絵」<sup>注13</sup>であり、「説明文や『語り』とは違った態度で読み取る必要のある、高度に発達した文章表現法」<sup>注14</sup>である。伝承物語には「描写」はほとんど無いが、大人の小説には何頁にもわたる「描写」が描かれる。「描写」の読み方を段階的に体得できれば、大人になっても小説を楽しく読むことができる。一方、それができなければ、低学年向けの物語は楽しめても「描写」が多くなるにつれて「難しい」「つまらない」「退屈」と感じ、読書離れに至る。

教材文で「描写」の読み方を指導し、それを活用するための読書の時間を確保することで、読書の楽しさを体験させることができる。その体験を小中高と継続することが読書意欲のある大人を育てることにつながる。

## 6. 物語・小説につながる読書指導

### 6.1 読書の二つの道筋（「絵本」と「物語・小説」）

絵本を絵と言葉の調和による独立した芸術の一領域と考える立場に立ち、「絵本」と「物語・小説」を区別した読書指導を提案する。

絵本では、絵自体が大切な芸術的要素であるから、それが言葉による「描写」に置き換わることはない。よって絵本をたくさん読み重ねても、物語・小説の「描写」を読む力を高めることはできない。絵本は絵本とし

て芸術的に完結するのであり、絵本の延長線上に物語・小説の読書はない。生涯を通して絵本を楽しむとともに、大人になっても物語・小説を楽しめる力を育成するための読書指導が必要である。

## 6.2 物語・小説のための読書指導

物語・小説のための読書指導を二つ提案する。

### (1) 幼小連携における伝承物語の読み聞かせ

物語・小説のための読書指導の一つ目として、幼稚園の4～5歳頃から小学校低学年での、伝承物語の読み聞かせを提案する。グリム童話に代表される伝承物語は、長年にわたる耳から耳への語り伝えにより、無駄のない簡潔な「語り」を中心に構成されているので、物語の進行を言葉だけで理解する初めの教材として適している。

また、伝承物語では、詳しい心理や情景の描写がない代わりに、人生の知恵が語られる。

「い」といったからには、「ろ」といわないわけにはいきません。夫は、最初妻のいいなりになったので、二どめもそうするほかありませんでした。（グリム童話「ヘンゼルとグレーテル」<sup>注15</sup>より。傍線は篠原による。）

たった一文の中に、誤った道へ一歩を踏み出す恐ろしさが淡々と語られる。意味は理解できなくても、聞いた言葉は丸ごと記憶に残り、人生経験を経て、悪い誘いを断らなければならない立場に立たされたとき、その意味の深さに気づく。

### (2) 描写に着目した段階的読書指導

物語・小説のための読書指導の二つ目として、小学校低学年から、絵本と伝承物語に加えて断片的な「描写」のある創作物語を読ませることを提案する。さらに、中学年、高学年、中学校と学齢が進むに応じて徐々に「描写」の量を増やし、長い描写のある作品を読む力を段階的に身につけさせる。

## 7. 「描写」に着目した段階的教材リスト

物語・小説のための読書指導の教材として、描写に着目した段階的教材リストを提案する。

### 7.1 伝承物語（幼稚園～小学校低学年）

伝承物語は、文字の普及していない時代の長い間の語り伝えによって、無駄な修飾は削ぎ落とされ、簡潔な「語り」と「会話」で構成される。「グリム童話」と日本昔話より、その例文を3例示す。（以下、傍線や四角囲みは篠原による。）

#### (1) グリム童話「灰かぶり」<sup>注16</sup>より

あるお金持ちのおくさんが、病気になるました。おくさんは、自分の最期が近づいたのを感じると、ひとりむすめをベッドのそばに呼んでいました。「ねえ、おまえ、いつまでも神さまを信じ、心がけをよくするんですよ。そうしたら、神さまがいつもお助けくださるよ。わたしは、天からおまえを見おろして、おまえにつきそってあげよ。」そういうと、母親は目をつぶって、息をひきとりました。（後略）

#### (2) グリム童話「三枚の、へびの葉」<sup>注17</sup>より

むかし、貧しい男の人がいました。たったひとりの男の子をやしなうことがもうできなくなりました。それでむすこはいいました。「お父さんはひどく苦しそうで、ぼくはお父さんの重荷になるようだから、いっそよそへって、パンをかせいだみるよ」といいました。そこで、お父さんは子どものしあわせを祈り、たいそう悲しくわかれました。（後略）

(3) 日本昔話「三人兄弟」<sup>注18</sup>より

昔むかし、大きな長者の分家に、三人の兄弟があった。一番上が太郎、次が次郎、末っ子を三郎といったが、太郎が一番のお人好しだった。ある日、父親は、三人の息子をよんで、「おまえたちは、もう一人前になった。これから三年の間、暇をやる。旅さ出してやるから、好きなことを修行してこい、その修行の次第によって、この家のあととりを決めるつもりだ」といいわたした。そこで、息子たちは、旅支度をして家を出て行った。(後略)

事実による簡潔な「語り」は、まだ認識の粗い幼児期から小学校低学年の子どもに読み聞かせる文体として適している。余計な説明や質問を挟まず、淡々と読み聞かせる。子どもが望めば同じ話を何度も繰り返して読み聞かせる。子どもが自ら感想を口にしたら取り上げてほめる。

7.2 断片的な「描写」が含まれる物語(小学校低学年～小学校中学年)

伝承物語などの読み聞かせを聞く体験を積み、言葉から出来事の筋を追えるようになると、自分なりのイメージを広げることを楽しめるようになってくる。その段階では、部分的に短い「描写」の入った物語が教材として適している。以下に教材例を2例示す。

(1) レオ・レオニ「スイミー」<sup>注19</sup>より

広い海のどこかに、小さな魚のきょうだいたちが、たのしくくらししていた。  
みんな赤いのに、一ぴきだけは、からす貝よりもまっくろ。およぐのはだれよりもはやかった。  
名前はスイミー。  
ある日、おそろしいまぐろが、おなかをすかせて、すごいはやさでミサイルみたいにつっこんできた。  
一口で、まぐろは、小さな赤い魚たちを、一ぴきのこらずのみこんだ。  
にげたのはスイミーだけ。  
スイミーはおよいだ、くらい海のそこを。こわかった。さびしかった。とてもかなしかった。  
けれど海には、すばらしいものがいっぱいあった。おもしろいものを見るたびにスイミーは、だんだん元気をとりもどした。

にじ色のゼリーのようなくらげ。  
水中ブルドーザーみたいないせえび。  
見たこともない魚たち。見えない糸でひっばられている。  
ドロップみたいな岩から生えている、こんぶやわかめの林。  
うなぎ。かおを見るころには、しっぽをわすれているほど長い。  
そして、風にゆれるやしの木みたいないそぎんちゃく。

そのとき、岩かげにスイミーは見つけた。スイミーのとそっくりの、小さな魚のきょうだいたちを。  
海の中の「すばらしいもの」の色や形が「描写」してあり、各自が具体的にイメージを描くことができる。断片的に羅列するシンプルな「描写」がこの時期の子どもに適している。次のような発問により、「描写」とそれ以外の部分の違いに気づかせる。発問例を次に示す。

【発問例】①海の中の「すばらしいもの」「おもしろいもの」の様子が詳しく書いてあるところを四角で囲みましょう。

②いくつ書かれていましたか。(六つ)四角の中を読んで、自分の頭の中に絵を描いてみましょう。

(2) 新美南吉「ごんぎつね」<sup>注20</sup>より

その中山から少しはなれた山の中に、「ごんぎつね」というきつねがいました。ごんは、ひとりぼっち小ぎつねで、しだのいっぱいしげった森の中に、あなをほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、辺りの村へ出てきて、いたずらばかりしました。畑へ入っていもをほり散らしたり、菜種がらのほ

してあるのへ火をつけたり、百姓家のうら手につるしてあるとんがらしをむしり取っていったり、いろいろなことをしました。

ひとりぼっちで寂しいごんが、かまってほしくて次々にいたずらをする場面である。次のような発問で、「描写」の部分に気づかせるとともに、その描写の読み方を教えることができる。発問例を次に示す。

- 【発問例】①ごんのしたいいたずらが三つ書かれています。線を引いて(1)(2)(3)と書き込みましょう。(解(1) 畑へ入ってもをほり散らしたり (2) 菜種がらのほしてあるのへ火をつけたり (3) 百姓家のうら手につるしてあるとんがらしをむしり取っていったり)  
②ごんはなぜそんないたずらをしたのでしょうか。(解 イ)  
ア いもなどがほしかったから  
イ さびしかったから

「兵十だな。」と、ごんは思いました。兵十は、ぼろぼろの黒い着物をまくし上げて、こしのところまで水にひたりながら、魚をとるはりきりというあみをゆすぶっていました。はちまきをした顔の横っちょように、円いはぎの葉が一まい、大きなほくろみたいにへばりついていました。

しばらくすると、兵十は、はりきりあみのいちばん後ろのふくろのようになったところを、水の中から持ち上げました。

短い人物描写で、兵十の貧しさ、一生懸命さ、ごんとの距離等を描き出している場面である。次のような発問で「人物描写」に気づかせるとともに、そこからどんなことを読み取ることができるか教えることができる。発問例を次に示す。

- 【発問例】①川の中にいる兵十の外見の様子が詳しく書かれているところを四角で囲みましょう。  
②この部分から兵十のどんな情報が分かりますか。(解 貧乏・一生懸命何かを取っている・ごんと兵十との距離は十メートルくらい)

### 7.3 「描写」のやや多い物語・小説（小学校高学年～中学校）

断片的な描写の読みに慣れてきたら、描写のやや多い物語・小説を教材とする。主に作品のクライマックスにやや長い描写が用いられることが多い。以下に教材例を2例示す。

- (1) 椋鳩十「大造じいさんとガン」<sup>注21</sup>より（紙面の都合で改行を変更した）

「あっ。」一羽、飛びおくれたのがいます。大造じいさんのおとりのガンです。長い間飼いならされていたので、野鳥としての本能がにぶっていたのです。

ハヤブサは、その一羽を見逃しませんでした。

じいさんは、ピュ、ピュ、ピュと口笛をふきました。

こんな命がけの場合でも、飼い主のよび声を聞き分けたとみえて、ガンは、こっちに方向を変えました。

ハヤブサは、その道をさえぎって、パーンと一けりけりしました。ぱっと、白い羽毛があかつきの空に光って散りました。ガンの体はななめにかたむきました。

もう一けりと、ハヤブサがこうげきの姿勢をとったとき、さっと、大きなかげが空を横切りました。残雪です。大造じいさんは、ぐっとじゅうをかたに当て、残雪をねらいました。が、なんと思ったか、再びじゅうを下ろしてしまいました。

残雪の目には、人間もハヤブサもありませんでした。ただ、救わねばならぬ仲間のすがたがあるだけでした。

いきなり、敵にぶつかっていきました。そして、あの大きな羽で、力いっぱい相手をなぐりつけました。

不意を打たれて、さすがのハヤブサも、空中でふらふらとよるめきました。が、ハヤブサも、さるものです。さっと体勢を整えると、残雪のむな元に飛びこみました。

ぱっ ぱっ 羽が、白い花卉のように、すんだ空に飛び散りました。

そのまま、ハヤブサと残雪は、もつれ合って、ぬま地に落ちていきました。

大造じいさんはかけつけました。

二羽の鳥は、なおも地上ではげしく戦っていました。が、ハヤブサは、人間のすがたをみとめると、急に戦いをやめて、よろめきながら飛び去っていきました。

残雪は、むねの辺りをくれないにそめて、ぐったりとしていました。しかし、第二のおそろしい敵が近づいたのを感じると、残りの力をふりしぼって、ぐっと長い首を持ち上げました。そして、じいさんを正面からにらみつけました。

ハヤブサと残雪の戦いの場面である。おそらく一、二分の出来事と思われる、おとりのガン・ハヤブサ・残雪の命がけの攻防が教科書の三ページにわたって、語りと描写を織り交ぜながら描かれている。ここでは、それまでのテンポとは明らかに異なり、ゆっくりと時間が進む。クライマックスの重要な場面では物語の展開が遅くなり、丁寧な「描写」で詳しく描かれる、という文学作品の特徴を初めて学ぶのに適した作品といえる。発問例を次に示す。

【発問例】①残雪とハヤブサの空中戦はどこからどこまでですか。四角で囲みましょう。

②時間にするとどのくらいの間の出来事でしょう。(一分弱)

(2) ヘルマン・ヘッセ「少年の日の思い出」<sup>注22</sup>より

僕は、八つか九つのとき、ちょう集めを始めた。初めは特別熱心でもなく、ただ、はやりだったのでやっていたまでだった。ところが、十歳ぐらいになった二度目の夏には、僕は全くこの遊戯のとりこになり、ひどく心を打ち込んでしまい、そのため、他のことはすっかりすぼかしてしまったので、みんなは何度も、ぼくにそれをやめさせなければなるまい、と考えたほどだった。(中略)

二年たって、僕たちはもう大きな少年になっていたが、僕の熱情はまだ絶頂にあった。その頃、あのエーミールがクジャクヤママユをさなぎからかえしたといううわさが広まった。今、僕の知人の一人が百万マルクを受け継いだとか、歴史家レビューのなくなった本が発見されたとかいうことを聞いたとしても、そのときほど、僕は興奮しないだろう。僕たちの仲間でクジャクヤママユを捕らえた者はまだなかった。僕は、自分の持っていた古いちょうの本の挿絵で見たことがあるだけだった。名前を知っていながら自分の箱にまだないちょうの中で、クジャクヤママユほど僕が熱烈に欲しがっていたものはなかった。幾度となく、僕は、本の中のその挿絵を眺めた。一人の友達は、僕にこう語った。「とび色のこのちょうが、木の幹や岩に止まっているところを、鳥や他に敵が攻撃しようとする、ちょうは、畳んでいる黒みがかかった前羽を広げ、美しい後ろ羽を見せるだけだが、その大きな光る斑点は、非常に不思議な思いがけぬ外観を呈するので、鳥は恐れをなして、手出しをやめてしまう。」と。



エーミールがこの不思議なちょうを持っているということを聞くと、僕は、すっかり興奮してしまって、それが見られるときの来るのが待ちきれなくなった。食後外出ができるようになると、すぐ僕は、中庭を越えて、隣の家の四階へ上がっていった。そこに、例の先生の息子は、小さいながら自分だけの部屋を持っていた。それが、僕にはどのくらい羨ましかったかわからない。途中で、僕は、誰にも会わなかった。エーミールはいなかったのだ。ドアのハンドルを回してみると、入り口は開いていることがわかった。

せめて例のちょうを見たいと、僕は中に入った。そしてすぐに、エーミールが収集をしまっている二つの大きな箱を手を取った。どちらの箱にも見つからなかったが、やがて、そのちょうは展翅板に載っているかもしれないと思いついた。果たしてそこにあった。とび色のビロードの羽を細長い紙切れで張り伸ばされて、クジャクヤママユは展翅板に留められていた。僕は、その上にかがんで、毛の生えた赤茶色の触覚や、優雅で、果てしなく微妙な色をした羽の縁や、下羽の内側の縁にある細い羊毛のような毛などを、残らず間近から眺めた。あいにく、あの有名な斑点だけは見られなかった。細長い紙切れの下になっていたのだ。

胸をどきどきさせながら、僕は紙切れを取りのけたいという誘惑に負けて留め針を抜いた。すると、四つの大きな不思議な斑点が、挿絵のよりはずっと美しく、ずっとすばらしく、僕を見つめた。それを見ると、この宝を手に入れたいという、逆らいがたい欲望を感じて、僕は、生まれて初めて盗みを犯した。僕は、ピンをそっと引っ張った。ちょうは、もう乾いていたので、形は崩れなかった。僕は、それをてのひらに載せて、エーミールの部屋から持ち出した。そのとき、さしずめ僕は、大きな満足感のほか何も感じていなかった。

ちょうを右手に隠して、僕は階段を下りた。そのときだ。下の方から誰か僕の方に上がってくるのが聞こえた。その瞬間に、僕の良心は目覚めた。僕は突然、自分は盗みを犯した、下劣なやつだということを悟った。同時に、見つかりはしないかという恐ろしい不安に襲われて、僕は、本能的に、獲物を隠していた手を上着のポケットにつっ込んだ。ゆっくりと僕は歩き続けたが、大それた恥ずべきことをしたという、冷たい気持ちに震えていた。上がってきた女中と、びくびくしながらすれ違ってから、僕は胸をどきどきさせ、額に汗をかき、落ち着きを失い、自分自身におびえながら、家の入り口に立ち止まった。

すぐに僕は、このちょうを持っていることはできない。持っていてはならない、元に戻して、できるなら、何事もなかったようにしておかなければならない、と悟った。そこで、人に出くわして見つかりはしないかということに極度に恐れながらも、急いで引き返し、階段を駆け上がり、一分の後には、またエーミールの部屋の中に立っていた。僕は、ポケットから手を出し、ちょうを机の上に置いた。それをよく見ないうちに、僕はもう、どんな不幸が起こったかということを知った。そして、泣かんばかりだった。クジャクヤママユはつぶれてしまったのだ。前羽が一つと触覚が一本、なくなっていた。ちぎれた羽を用心深くポケットから引き出そうとすると、羽はばらばらになっていて、繕うことなんかもう思いも寄らなかった。

盗みをしたという気持ちより、自分がつぶしてしまった、美しい、珍しいちょうを見ているほうが、僕の心を苦しめた。微妙なとび色がかった羽の粉が、自分の指にくっついているのを見た。それをすっかり元どおりにすることができたら、僕はどんな持ち物でも楽しみでも喜んで投げ出しただろう。

「僕」が、ちょうを盗み、元に戻しに行くがちょうはつぶれてしまっていた、というクライマックスの場面である。時間にするとおそらく数分間程度の「僕」の心理と行動が教科書の約三ページにわたって「描写」されている。

「八つから九つ」のときの記述がたった二行ですまされていることと対比して読ませることによって、クライマックスの重要な場面では物語の展開が遅くなり、丁寧な「描写」で詳しく描かれる、という文学作品

の特徴を学ぶのに適した作品といえる。発問例を次に示す。

- 【発問例】①「僕」がエーミールのクジャクヤママユを盗み、その後絶望を感じている場面を全部四角で囲みましょう。
- ②時間になるとどのくらいの間の出来事でしょう。(解 五分くらい)
- ③「八つか九つ」の時のことは、何行で書かれているでしょう。(解 二行)

#### 7.4 「描写」が中心の小説(中学校以上)

クライマックス等でやや多い描写を用いた物語・小説に慣れてきたら、描写が中心の小説を教材に用いる。以下に教材例を2例示す。

##### (1) 夏目漱石「坊っちゃん」<sup>注23</sup>より

清はときどき台所で、人にいないときに「あなたはまっすぐでよいご気性だ。」とほめることがときどきあった。しかし、俺には清の言う意味がわからなかった。いい気性なら、清以外の者も、もう少しよくしてくれるだろうと思った。清がこんなことを言うたびに、俺はおせじはきらいだと答えるのが常であった。すると、ばあさんは、それだからいいご気性です。と言っては、うれしそうに俺の顔を眺めている。自分の力で俺を製造してほこってるように見える。少々気味が悪かった

親から叱られてばかりいる「坊っちゃん」に、使用人の「清」が深い愛情を示す場面である。この場面では、大人(老女)の子どもへの愛情の示し方をよく理解できず、ほめられても喜ぶどころかほめた相手を不審に思う「坊っちゃん」の幼さが巧みに描写されている。相手の気持ちを理解できない「坊っちゃん」が、一方では大人ぶって自分の置かれた状況を客観的に分析しているところがおもしろい。論理的に物事を考える力は発達してきたがまだ人情を理解するには人生経験が不足している少年の人物像を見事に描き出している。その姿を見てまたうれしがる「清」とのちぐはぐなやりとりも大人にとってはおもしろい描写である。発問例を次に示す。

- 【発問例】①この部分からは、あなたは、ア・イのどちらを強く読み取りますか。どちらでもない場合は、ウに自分の考えを書きましょう。
- ア 「坊っちゃん」は、清の自慢のりっぱな人物である。
- イ 「坊っちゃん」は、大人の行動の意味が分からない幼い人物である。
- ウ その他( )
- ②そう考える理由を話し合ひましょう。

「ア」は人生経験を経た大人の描写の読み方、「イ」は文字通りの子どもの読み方、と考えることができる。また、他の読み方を示す個性的な学習者もいるかもしれない。この発問は、正解を決めず、それぞれの読み取り方の違いを話し合ひ、小説には何層もの深さで読める「描写」という技法があることに気づかせることを目標としている。

##### (2) 安岡章太郎「幸福」<sup>注24</sup>より

この叔父はヘンに気まぐれな男で、僕はこれまでも彼のおかげで再三、こういう具合に突発的に用をさせられている。

「自分が帰る汽車の寝台券ぐらい、自分でとりに行ったらいいじゃないか」

「また、そんなことを言う。Sさんは、今夜はどうしても人と会っておかなければならない用件があって出掛けちゃったのは、おまえも知っているだろう。ぐずぐず言っているひまに、早く行っておいで」

母は、ふだんは叔父のことを、あんなにずうずうしい男はいない、などと陰口をきいてばかりいるくせに、こういうときに限って、なぜか叔父の肩を持ちたがる。

母は玄関さきで、叔父から預かった金をふきげんな顔つきで手渡した。僕は、そいつを無造作にたもとにつっこんで(中略)訊いた。

「行くよ、行くからその代わりに、おつりはもらっといていいんだろう」

「さあね、自分で叔父さんに訊いてごらん」

母は冷淡に答えた。どうせガッチリ屋の叔父に、そんなことを僕が言い出せっこないことは、よく知っているのだ。僕は、むっとり黙って外へ出た。すると、とたんに頭に冷たいものが落ちてきた。いつの間にか雨が降り出していたのだ。僕は、ますます憂鬱になりながら、引き返すと重い毛織子のコウモリがさを片手にさして、すっかり暗くなった道を歩きだした。

家族や親戚の間の微妙な人間関係を描いた描写である。母はちよくちよく自分の家を宿代わりに利用する夫の弟に対して、常々不満を感じているが、他人であるため面と向かって本音を言うことはできない。その上、切符を買ってくるという雑用を自分の息子にさせなければならないことに不機嫌になっている。しかし、その矛先は気持ちを許せる親しい息子に向けられ、その機微をまだ理解できない息子は、母の「叔父」に対する一貫性のない態度に不平を述べている。人の心情を深く推察するほどには大人ではないが、母の矛盾を指摘するだけの成長は遂げている少年期の心情を巧みに描き出した描写である。「僕」の母への態度をどう読み取るかにはそれまでの読み手の人生経験が現れる。発問例を次に示す。

【発問例】①この部分からは、あなたは、ア・イのどちらを強く読み取りますか。どちらでもない場合は、ウに自分の考えを書きましょう。

ア 母は、「僕」に不満をもっている。

イ 母は、「おじ」に不満をもっている。

ウ その他（ ）

②そう考える理由を話し合ひましょう。

「ア」は文字通りの子どもの読み方、「イ」は人生経験を経た大人の描写の読み方、と考えることができる。また、他の読み方を示す個性的な学習者もいるかもしれない。この発問は、正解を決めず、それぞれの読み取り方の違いを話し合ひ、小説には何層もの深さで読める「描写」という技法があることに気づかせることを目標としている。

## 7.5 高度な「描写」による大人の小説

以上、幼小中における描写に着目した段階的教材リストを示した。最後に高度な描写による大人の小説の作品を2例示す。

### (1) ツルゲーネフ『獵人日記』<sup>注25</sup>より

九月なかばころの秋のある日、わたしは白樺林の中に腰をおろしていた。朝のうちから小雨がぱらついたり、ときどき暖かい陽光（ひ）がさしたりして、定まらぬ空合いであった。空はもやもやした白い雲にいちめんにおおわれるかと思うと、不意にところどころ、東の間、雲ぎれがして、押し分けられた雨雲のあいだから、明るくやさしい青空が、美しい瞳のようにあらわれる。わたしは腰をおろして、あたりを見まわしながら、耳をすましていた。木の葉が頭の上でかすかにさやいでいたが、それを聞いただけで、季節を知ることができた。それはにぎやかな、笑いささめくような春のざわめきでもなければ、夏のものうげなさやきや長話でもないし、晩秋のおどおどしたうそ寒いようなくり言でもなく、ほとんど聞きとれないような、眠たげなつぶやきであった。それかあらぬかすかなそよ風が梢（こずえ）をそっとわたってゆく。雨に濡れた林の中の様子は、日が照るか、雲にかげるか、たえず変った。あるいは、不意に何もかも笑いつつまれたかのように、あざやかに照らしだされて、まばらな白樺の細い樹が、急に白絹のようなやわらかい照りかえしを受け、いちめんに散りしいた小さな落葉が、とたんに錦を散らして、黄金色に燃えたつ。高くほつれた蕨の美しい茎は、よく熟れた葡萄のような、もうおのれの秋の色に染められて、果てしなくもつれあいながら、きらきらと目の前に光を散らす。と不意に、またしてもあたりは薄青い影をおび、あざやかな色合いはまたたくまに消えうせて、白樺は輝きのないしらじらとした色にもどる。それはまだ冷たくたわむれる冬の陽光にふれられぬ、降りたての雪のような白さである。すると、そっと、ずるそうに忍び笑いをしながら、霧雨がおりてきて林にささやきかけ

る。白樺の葉は、目に見えて色あせてはいるものの、まだほとんどが緑のままだったが、ただそちらこちらに一本、二本と、すっかり赤く色づいたのやら、黄金色に染まった若木が見うけられて、いましがた雨に洗われたばかりの、ぬめるように白い小枝のこまかい網目のあいだから、ちらちらもれおちる陽光をあびて、不意にぱっと燃えたつさまはまさに目をうばう美しさであった。

洗練されたヨーロッパに比べて、文化的にはやや後進とみられていた当時のロシアの、何物にも負けない自然の美しさを描くことで、作家ツルゲーネフは祖国への愛情を表現した。たくさんの言葉を費やしたこの描写は、全て最後の一語「目をうばう（自然の）美しさ」を描き出すためだけに綴られている。中でも、九月の風のさやぎを描くにあたって、「…春のざわめきでもなければ、夏の…ささやきや長話でもないし、晩秋の…くり言でもなく…」という表現によって、一年中の白樺林の風の音の美しさを描き出した手法は見事である。このツルゲーネフの新しい自然美の描写から自然の見方を学んだ国木田独歩は『武蔵野』を著した。(2) フローベール「ボヴァリー夫人」<sup>注26</sup>より

ある朝シャルルが夜明け前から家を出て行ったとき、彼女はふと、ロドルフに今ぐ会いたくなかった。ユシェット荘へはすぐ行ける。一時間いて帰ってきてても皆はまだ寝ているだろう。そう思うとはげしい欲望に息がはずんだ。エンマはやがて草原の真中へ出て、後をも見ずに急ぎ足に歩いた。

夜はまさに明けようとしていた。エンマは、はるかに恋人の家を認めた。つばめの尾のような風見が二つ、うす明かりの中にくっきり浮いて見えた。

農場の庭を過ぎると母屋があった。あれが屋敷にちがいがなかった。近寄ると壁が自然に開いたかのようになり彼女はすっとその中に入った。(中略)

この最初の大胆な試みが成功したので、今はもう、シャルルが朝早く出かけたたびごとに、エンマは手早く服を着て、川岸へ通じる石段を忍び足に降りた。

しかし、牛を渡す板橋が取りのけてあるときには、川沿いの壁について行かねばならなかった。岸はよくすべった。倒れないように、うら枯れたあらせいとうの束にしがみついた。それから畑を横切った。足がめり込み、よろめいた。華奢な靴を抜くのに困った。首にまいた薄絹は雑草の中で風にひらめいた。エンマは牛がこわかった。牛がいると駆け出した。そして頬をばら色に染め、樹液と青草と大気の香りを全身から匂わせながら、息を切らしてたどりついた。その時分ロドルフはまだ眠っていた。それはちょうど、春のあけぼのが部屋のなかへ入ってきたようであった。

夜明けに恋人ロドルフのもとへ急ぐエンマの描写である。すべる川岸、足がめり込む畑、怖い牛等の障害をもものともせず、必死で恋人に会いに行くエンマの姿が、夫に背く不道德な女性としてではなく、生き生きと美しく描かれている。後半の「樹液と青草と大気の香を全身から匂わせながら」や「春のあけぼのが部屋のなかへ入ってきた」というエンマの描写は、偉大な自然を我が身にまとった、生命感あふれる人物像の魅力を見事に描き出している。

## 8. まとめ

これまでの読書指導では、「絵本」と「物語・小説」の違いが重視されず、絵本が好きな子どもはいずれ小説も読めるようになると考えられていた。その考えが学齢が進むに伴う読書離れの一因となっている。

「絵本」と「物語・小説」を区別した丁寧な読書指導が必要である。物語・小説のための読書指導では、幼小連携した伝承物語の読み聞かせと、「描写」の読み方の段階的な指導が効果的である。今後、そのための指導方法の確立及び教材開発に努めたい。

## 9. 成果と課題

### 9.1 成果

- (1) 学齢が進むに伴う読書離れを防ぐための一案として、幼小連携による伝承物語の読み聞かせを提案できた。
- (2) 描写に着目した物語・小説の段階的教材案を提案できた。

### 9.2 課題

- (1) 幼小連携による読み聞かせの具体的な方法と、効果的な伝承物語の教材案を提示する。
- (2) 提案した描写に着目した段階的教材案に基づき、実践による検証を行う。

#### 注

- 注1 文部科学省「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」関係資料（平成30年4月）より
- 注2 中村孝一「生徒の読書実態とこれからの読書指導—新学習指導要領における読書の位置づけ—」『早稲田大学国語教育研究 第38集』早稲田大学国語教育学会，2018年3月，p25
- 注3 大越和孝他編『保育内容「言葉」改訂 言葉とふれあい，言葉で育つ』東洋館出版，2009，p37
- 注4 瀧薫『保育と絵本』エイデル研究所，2010，p204
- 注5 市毛勝雄『文学的文章で何を教えるか』明治図書，1983，pp.85-87
- 注6 新村出編『広辞苑 第六版』岩波書店，2008，p323
- 注7 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典第二版 第二巻』小学館，2001，p696
- 注8 日本児童文学学会編『児童文学事典』東京書籍，1988，p96
- 注9 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』大日本図書，1993，p327・329
- 注10 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典第二版 第十二巻』小学館，2001，p1347
- 注11 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典第二版 第七巻』小学館，2001，p176
- 注12 長谷川祥子編『はじめて学ぶ人のための国語科教育学概説 小学校』明治図書，2018，pp.52-59
- 注13 市毛勝雄『文学的文章で何を教えるか』明治図書，1983，p208
- 注14 市毛勝雄『文学的文章で何を教えるか』明治図書，1983，p28
- 注15 高橋健二訳『グリム童話全集1』小学館，1976，p197
- 注16 高橋健二訳『グリム童話全集1』小学館，1976，p143
- 注17 高橋健二訳『グリム童話全集1』小学館，1976，p153
- 注18 稲田和子・筒井悦子『子どもに語る 日本の昔話1』こぐま社，1995，p83
- 注19 『こくご二上 たんぽぽ』光村図書，2015，pp.54-55
- 注20 『国語四下 はばたき』光村図書，2015，pp.8-9・pp.10-11
- 注21 『国語五 銀河』光村図書，2015，pp.126-128
- 注22 『国語1』光村図書，2016，pp.204-211
- 注23 『国語1』光村図書，2016，p.267
- 注24 『なまけもの思想』角川文庫，1973，pp.6-7
- 注25 ツルゲーネフ・工藤精一郎訳『獵人日記』「あいびき」新潮文庫，1972，pp.384-385
- 注26 フローベール・伊吹武彦訳『ボヴァリー夫人 下巻』岩波文庫，1939，pp.17-18

引用文献・参考文献

- 1 松居直, 『絵本とは何か』, 東京, 日本エディタースクール出版部, 1973
- 2 高橋健二訳, 『グリム童話全集 I～III』, 小学館, 1976
- 3 市毛勝雄, 『主題認識の構造』, 東京, 明治図書, 1980
- 4 市毛勝雄, 『文学的文章で何を教えるか』, 明治図書, 1983
- 5 飛田多喜雄・野地潤家監修, 『国語教育基本論文集成 第16巻 (国語科と文学教育論 文学教育論と指導研究)』, 東京, 明治図書, 1993
- 6 飛田多喜雄・野地潤家監修, 『国語教育基本論文集成 第18巻 (国語科読書指導論)』, 東京, 明治図書, 1993
- 7 飛田多喜雄・野地潤家監修, 『国語教育基本論文集成 第11巻 (国語科理解教育論 (1) 物語・小説教材指導論)』, 東京, 明治図書, 1994
- 8 河合隼雄・松居直・柳田邦男, 『絵本の力』, 東京, 岩波書店, 2001
- 9 大越和孝他編 『保育内容「言葉」改訂 言葉とふれあい, 言葉で育つ』, 東洋館出版, 2009
- 10 長谷川祥子編, 『はじめて学ぶ人のための国語科教育学概説 小学校』, 明治図書, 2018
- 11 文部科学省, 「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」関係資料 (平成30年4月)
- 12 文部科学省, 『幼稚園教育要領解説』, 東京, フレーベル館, 2018
- 13 文部科学省, 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 国語編』, 東京, 東洋館出版, 2018